

## 11・25自決の日（2）

まず、映画を見た感想から申し上げますと、私にとっては、少し不完全燃焼でした。つまり、三島という作家を割腹自殺する所まで突き動かして行ったものの正体は、私にとっては今でも闇の中です。

私の手元には、三島氏が市ヶ谷駐屯地を占拠した際、自衛隊員の決起を促すために撒いた「檄文」の写しがあります。「檄文」は、三島氏独特の、硬質な字体でB4版用紙に細かい字でびっしりと書き込まれています。



三島由紀夫による檄文（直筆）の写し

私は、小説家三島由紀夫の作品のファンではありませんし、彼の思想についても理解しているわけではありませんが、この「檄文」から、三島氏の思いの一端を窺い知る事は出来ます。

### 檄

われわれ楯の会は、自衛隊によって育てられ、いわば自衛隊はわれわれの父でもあり、兄でもある。その恩義に報いるのに、このような忘恩的行動に出たのは何故であるか。

（中略）

われわれは戦後の日本が、経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失い、本を正さずして末に走り、その場しの

ぎと偽善に陥り、自ら魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た。

政治は矛盾の糊塗、自己の保身、権力欲、偽善にのみ捧げられ、国家百年の大計は外国に委ね、敗戦の汚辱は払拭されずにただごまかされ、日本人自ら日本の歴史と伝統を潰していくのを、歯噛みをしながら見ていなければならなかった。

(中略)

国の根本問題である防衛が、御都合主義の法的解釈によってごまかされ、軍の名を用いない軍として、日本人の魂の腐敗、道義の頹廢の根本原因をなしてきているのをみた。

(以下略)

三島氏は、戦後日本の経済的繁栄と道義の退廃に焦燥していたのではないかと感じます

特に、檄文の根幹にあるのは、「戦後民主主義の欺瞞を最も象徴しているものとして自衛隊を取り上げ、その自衛隊の“目ざめる日”を求める」ものであったといってよいでしょう（保阪正康著「三島由紀夫と楯の会事件」から）。

即ち、「自衛隊は違憲の存在であり、広く国民に認知された存在ではない。しかも、国防という国家の基本に係わる権利を、戦後政治体制が曖昧にしてきたために、文化や伝統まで崩壊し、民族の歴史的基盤まで変化している」というのが、三島氏の主張するところと考えられます（保阪正康著「三島由紀夫と楯の会事件」から）。

三島氏は、私財を投じて「楯の会」という組織を作っています。それは、多分に右翼的色彩の強い、民間の祖国防衛隊（民兵組織）でした。

「楯の会」が創設されたのは昭和43年（1968年）のことであり、その当時は、既成左翼によるデモ等が激しく行われると共に、大学紛争、ベトナム戦争反対、沖縄返還闘争、成田新空港反対闘争などのいわば反体制的運動が大きくなっており、そのエネルギーは、今では想像すらつきません。

その年の10月21日に行われた国際反戦デーのデモは大荒れに荒れ、街頭には火炎瓶が投げられ、炎がいたるところで舞い上がるという事態となりました。これに対して、警視庁は騒乱罪を適用し、暴動と化したデモ隊を鎮圧します。それは、国内の治安維持の為に自衛隊が出動する機会はない、という事を明確に示すことになりましたが、そうした事態は、三島氏にとって痛恨事であったに違いありません。しかし私には、三島氏が、自衛隊を日本の伝統や文化の守り手、また、日本の精神の支柱足らしめようとした事は、如何に時代を憂い、憂国の思いが厚かったにせよ、理解することは出来ません。

若松監督は、連合赤軍と楯の会の若者達について「どちらも日本を憂いて何かをやろうと立ち上がり、命を懸けた若者たちだ。日本にもこういう若者がいたということを歴史の1ページとして残しておきたかった。」と、彼らの行動を評価する発言をしています（6月21日付道新）。

それに比べて今どきの若者は、という事になるのかも知れませんが、私たちは、世界の平和の為に殉じた秋野豊さん、3・11の東日本大震災で、最後まで住民の避難を呼びかけながら自分は津波に吞まれた遠藤未希さん等のように、命がけで自己の使命を果たそうと努力した人々の存在を知っています。

私には、そうした彼らの行動こそ、尊く、美しいと思っています。

（塾頭 吉田 洋一）